

## まえがき

立命館大学 人間科学研究所 所長  
(同 先端総合学術研究科 教授)  
松原 洋子



2017年12月10日(日)、立命館大学人間科学研究所の2017年度年次総会「研究者のライフ・イベントとワーク・ライフ・バランス」が開催された。本冊子はその記録である。

目次の最初にある「開会挨拶」が当日の企画の趣旨説明や簡単な紹介を兼ねているため、ここでは、人間科学研究所が、今回のような、いわば啓発的な企画を開催した背景と趣旨について、3点述べておきたい。

1つ目の背景は、人間科学研究所の成り立ちである。立命館大学に2000年に設立されて以来、この研究所は女性研究者と若手研究者の活躍がその特長の1つであり続けてきた。例えば2017年度の研究所運営委員の約半数が女性であり、2017年度の研究所重点プロジェクトの構成を見ても、女性研究者が代表を務めるチームは約4割にのぼる。また女性に限らず、子育てをしながら研究との両立を図ろうと奮闘されている方、育児休業から復帰したばかりの方、さらに結婚されたばかりの方も含まれる。

また、大学院生やポストドクトラルフェロー(現在の本学の制度では「専門研究員」として人間科学研究所の研究プロジェクトに参画した若手研究者は、今や全国の研究機関に散らばっている。先の3月も、他大学へ専任教員として2名の若手を送り出したばかりである。「研究所が育てた」というよりは、この17年間、研究所はこうした若手研究者に「支えられてきた」というのが実態であったらう。このような背景を持つ研究所にとって、研究者とワークとライフのバランスを考えることは、ある意味、責務の1つであるとも言える。

2つ目は、現在の研究所の研究テーマとの親和性である。主に乳幼児期を対象とした、科学的根拠に基づく子育て支援のための研究プロジェクトが、2016年度より学内外の大型資金を得てスタートした<sup>1)</sup>。結婚・妊娠・出産・生殖を重要なテーマとするプロジェクトもあり、構成員の1人である若手研究者は昨年度、同テーマで初の編著を出版した<sup>2)</sup>。「介護者支援」も研究所創成期以来の重要なテーマであり、男性介護者の支援団体立ち上げ<sup>3)</sup>にもつながっている。今回の登壇者の1人である安田裕子（総合心理学部准教授）は、生涯発達やキャリア分岐にかかわる研究を継続して行っており、昨年、新たに同テーマで編著を出版した<sup>4)</sup>。当日のフロアで真剣に聴き入る聴衆の中には、大学生のキャリア教育、教育から労働への移行を研究テーマとする若い女性研究員<sup>5)</sup>の姿もあった。

ここで挙げたのはほんの一部の方に過ぎないが、こうした構成員を抱える当研究所は、単なる啓発的な意味にとどまらず、学術的な面からも「研究者のライフ・イベント」「ワーク・ライフ・バランス」を考えることのできる組織であるといえる。

背景の3つ目は、2016年度より本学に発足した「リサーチライフサポート室<sup>6)</sup>」の存在である。同室は、本学が2016年度にJST 科学技術人材育成費補助事業「ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ（特色型）」に採択されることを受け、学内の女性研究者支援を主な目的として設立された機関である。上述したように、研究所内には育児中の研究者も多く在籍していることから、同室のサポートを受けている方も多い。また逆に、所内の研究者が女性研究者のモデルケースとして学内交流会等で講師を務めることもある。今回の総会では、同室から特別協力を得て、共にワーク・ライフ・バランスの観点から研究者支援を考えることとなった。

例年行ってきた研究発表や学術的なシンポジウムとは異なる、啓発的な性格を持つ企画の主催は、研究所にとっては挑戦であった。しかし、当日は他大学からいらっしゃった方（教員・職員）や本学の学生など、100名近い方にご来

場いただくことができた。2017年度で所長の職を退いた私にとっては、対外的な最後の仕事になったこともあり、非常に嬉しい限りである。シンポジウムでご登壇をいただいた方々、ポスターセッションの発表者および当日ご来場された聴衆の皆様に、この場を借りて感謝申し上げたい。

## 注

- 1) 詳細は『インクルーシブ社会研究』第17号（相澤育郎・矢藤優子編、2017）収載の「シンポジウム2 縦断研究のこれまでとこれから：科学的根拠に基づく対人援助を目指して」を参照。
- 2) 由井秀樹（編著）『少子化社会と妊娠・出産・子育て』（2017年4月、北樹出版）
- 3) 津止正敏（立命館大学）が事務局長を務める男性介護者と支援者の全国ネットワーク（略称：男性介護ネット）<https://dansei-kaigo.jp/>
- 4) 安田裕子・サトウタツヤ（編著）『TEMでひろがる社会実装：ライフの充実を支援する』（2017年8月、誠信書房）
- 5) 片山悠樹他（編）『半径5メートルからの教育社会学』（2017年9月、大月書店）、有田亘他（編）『いろいろあるコミュニケーションの社会学』（2018年3月、北樹出版）などで分担執筆のある妹尾麻美。
- 6) 立命館大学男女共同参画推進リサーチライフサポート室 HP：<http://www.ritsume.ac.jp/research/rsupport/>